

メープルレター（62）（1）

マダム田中の入院

緑の美しい初夏になりました。港には2年半ぶりにオランダの豪華客船がはいてきました。オールドモントリオールの町並みも少し活気づいてきたように見えます。

3月末に2年ぶりに開催された天皇誕生日祝賀祭の花の活けこみをし、その翌日の義理の長男の次女の洗礼式及びお祝いパーティーに出席し、弥生の月の行事は終わりました。洗礼のお祝いには寿司桶け二つに20人分のお寿司と子供たちが好きな卵焼きを、前日の活けこみの疲れと戦いながら用意しました。洗礼式はルーマニヤ人のお嫁さんに会わせギリシャ正教で行われました。マルチ用途の教会なのか、先ほどまでカトリックでお葬式をしていたかと思うと、時間が来ると回り舞台のようにガラガラと回って教会の様相が変わり、ギリシャ正教の装飾になりました。きらきらと金、銀、赤をふんだんに使った派手な装飾に驚きました。ドリトル先生に言わせると、

「カトリックとほぼ同じだけれど法王を認めない宗教なんだ。やたらと複雑なマニュアルでしかも派手。僕にはあまりよくわからない。」

派手な服装の神父が、数々のプロセスやお祈りの後、寒い教会の中で、裸にさせられた次女をざぶーんと銅製の桶（多分お湯だと思います）につけ、洗礼式はクライマックスに達しました。新しい白い洋服に着替えされ、十字架をつけた、ピュアな天使のような次女が泣き続けているうちに洗礼式は終わりました。

「宗教はなんであれ、誕生を祝う礼式は何よりも大事だと思うよ。僕はとても嬉しい。」

とドリトル先生はお祝いの一言を長男夫婦に送っていました。自宅でのお祝いパーティーにはフレデリックトンから次男も加わり楽しく過ぎていきました。テーブルのこっちと向こうでお寿司の桶を挟んで、卵焼きを食べたい長男の長男とサーモンの握りずしを食べたい長女が向き合いにらめっこをしています。

「パパがオーケーって言ったらすぐ食べるんだから動かない。」

と微動だにしない二人を見ていると、このためだけにでも頑張っただけよかったとマダム田中は思うのでした。

その翌週のこと、春を待つばかりの4月始め、ちょっと買い物にと家を出て隣の公園を通り抜けたマダム田中は、足を滑らせ転倒し、何が何だかわからないまま痛さにうずくまってしまったのです。後ろにいたイケメン、イケ女のカップルがかけよって助けてくれ、救急車を呼んでくれました。ドリトル先生に急いで電話すると駆けつけてくれました。ともかく痛かったのです。寒い日でした。まず消防車が到着し（救急車がなかなか来ない時は、消防車がまず駆けつけるのが義務だそうです）、酸素マスク（必要ないのに）をかけ、毛布をかけてくれ救急車を待つこと30分。タンカーで運びこまれ、簡単な検査を受けると近くの病院に搬送されました。

「マダム、ここがどこかわかりますか」

頭もコンクリの路上に打ちつけたのか血が出ていたので脳震盪を起こしているのか心配したようです。

「単なる打撲かも、転んだ場合、良くあることだから。」

救急車の担当者のその一言はまるで素人の言うことだと判明したのはその夜の事です。病院の救急入口で手続きを済ませると、救急車は姿を消し、入口の受付は慣れた手付きで鎮痛剤を二錠渡すと車いすに乗せ、緊急病棟の受付で待つよう指示しました。ドリトル先生は痛みをうめくマダム田中に付き添い、様々の用紙に書きこみ、待つこと7時間。やっと緊急医の診断を受けられることになりました。痛みをうめきながら、病院のジャケットに着替え、のたうち回りながらレントゲンを撮り、

「幸いなことに肩は大丈夫なようですが、膝は骨折で手術するので、このまま入院になります。念のため肩は固定しておきます。」

翌日、外科医が更にスキャンをとり、左膝は手術。右肩にはひびが入っているが、手術はせず自然治癒ということになりました。

膝の手術までの丸二日間は、緊急病棟の隅っこの廊下のような所に入院することになりました。簡単なカーテンで仕切られたベッドが金魚のうんこのようにじゅつつなぎに並んでいます。飲まず食わずで、激痛をモルヒネで抑えるだけの二日間でした。

「担当のスペシャリストに会わせてほしいと言わないと貴女のカルテは忘れられるわよ。」

親切な看護婦が気を利かせて連絡を取ってくれたおかげなのか、翌日（三日目）に、手術となりました。

麻酔室に着くと、担当医二人とテクニシャンが待っていて、（これがスペシャリストに会うということなようです。）

「僕が、麻酔の量を計ります。局部麻酔です。」

「僕が打ちます。」

「僕が麻酔の状態を観察します。」とテクニシャン。きっかり30分かかりました。次いで、三人の外科医（皆、若い。40歳そこそこ）が自己紹介すると手術の開始です。3人のイケメン外科医が動いているのが見えます。50分きっかりで、無事手術は終わり、麻酔の切れる状態を観察したのち（専門の看護婦がいて、75分かかりました。優しい人で、楽しい話題を見つけるとは、退屈しないように計らってくれ、最後に、「これから痛くなるから」とモルヒネを打ち、）病室へと運ばれていきました。

病室は最新のホテル並みの清潔な部屋でした。かかりつけ看護婦が昼夜交代で担当し、その度に自己紹介に来ます。もっともお世話になることになったのが、その下で働く担当の世話係でした。2名つき、ジャケットの着替え、食事の世話やトイレの世話から毎朝体の隅々を拭いて清潔を保つことなど、すべての雑事をしてくれました。チュニジア人、コロンビア人、ブラジル人、ペルー人、アルジェリア人、コートジボワール人、世界中からの移民の女性たちでした。明るくて親切で、おしゃべり好きな女性たちでした。病院では一番下の人たちなのかもしれませんが、きらきらと光る、病院を盛り立てて病人のために働く人たちでした。

手術の翌日、

「はい、立って歩いてください。」

そう言って入ってきたのは理学療法士でした。

「術後です。ベッドから降りられません。」右肩（右肩から腕にかけて）は固定され、左脚もサポーターで固定され、動くのは左手と右足だけで、身動き一つできないのです。

「体をベッドの端に近づけてよじって、右足をつけておきなさい。」

エビが跳ねるように飛び降りると、

「はい歩行器につかまって歩きなさい。」

「無理、無理。痛すぎる。」

あれやこれやと試させ、

「今日はこれだけにしておくけど明日は歩くのよ。」

あー痛い。すぐモルヒネ。看護婦さんと呼ばなくちゃ。不思議なことに翌日からは歩行器で歩けたのです。

モルヒネとスパルタのリハビリとの日々を過ごし、肩の激痛と戦いながらも、徐々に歩けるようになっていきました。このままでは家での暮らしが不可能だから本格的なリハビリが必要と、リハビリセンターに移ることになっていたその日、

「コロナの集団感染が出たから。しばらく待機。」

また、その翌日、理学療法士は、

「貴女の所は、建物の入り口が階段があったのよね。階段の登り方を特訓するから。私が貴女にしてあげられるのはここまでなのよ。これから先は担当医に聞いて他のリハビリを受けるようにしてください。」

担当医に会う機会などないのに、どうやって聞いたら良いものやら。

その翌日

「退院してもらうから。荷物をまとめて」

突然、看護婦がはいってくると、書類の入った封筒を手渡し、口をはさむ暇もなく、退院を勧告したのです。きっと、もう後が詰まっているのか、イースターの休みに入るからなのかもしれません。茫然とするばかりでした。

「えーっ。これからの治療は？」

慌てて迎えに来たドリトル先生と病院を後にすることになったのです。

続く。。。